

I (配点 135 点) 出典：梶井基次郎「のんきな患者」

出典は梶井基次郎「のんきな患者」による。梶井基次郎は、大正、昭和に作品を発表した小説家。同人雑誌『青空』に発表した詩情豊かな「檸檬」をはじめ、すぐれた短編を遺している。三高(京都大学の前身)在学中から肺を病み、病に冒された自己の生活を素材とした「のんきな患者」(昭和7年1月『中央公論』)を発表後、昭和7年3月に31歳で没した。吉田が現在どのような状態にあり、その自身の状態を吉田がどのように認識しているのか、エピソードの時間関係などに注意しながら読むことが求められる。

問一 漢字問題

A 滑稽 B 介 C 占 D 容態(容体・様体) E 納得

Aの間違いが、少し目立った。画数の多い漢字は、一点一画まで正確に書けるようによく注意して学習してほしい。また、漢字問題は、文脈における意味を正しく理解していないと正答できないため、画数が少ない漢字が必ずしも易しいというわけではないので、語彙を増やすことも意識してほしい。

問二 漢字の読みの問題

- ① しょうじ ② こまもの ③ あらものや ④ おもや(もや)
⑤ くちょう

②と③が、予想外に読めていなかった。「しょうかんぶつ」「こうぶつや」という音読みの解答も複数見られ、これらの語が、受験生にとってなじみのないものになってしまっていることが窺えた。「小間物」「荒物」は、近代の小説にはよく登場するし、現代でもまだ耳にすることのある語だと思う。近代の小説に多く触れ、その時代の事物を表す語に親しむことも言葉の学習として重要である。

問三 吉田が鏡を持って来させた理由を問う問題。設問箇所直後に、「風景を反射させては眺めたりした」とあるので使用意図は明白なので、そのことと、設問に「吉田の状況に留意して」とあるので、「吉田の状況」、つまり病状を結び付けて答えればよい。よくできていた。

問四 「母親が自分のそんな意志を否定すれば」という部分の「意志」が誰のどんな意志であるかを問う問題。設問箇所前後には、「そんな」という語や「自分」という語が多用され、それぞれが指す内容に注意する必要がある。誰の意志であるかを考える際に、

まず、「意志」という語に気をつけてほしい。「意志」とは、目的のはっきりした積極的な心の働きである。「自分 (= 吉田)」がそれを眺めることが出来ると思っているのか」という部分に着目した解答が多かったが、ここをすぐに「という意志」という形につなげるのは不自然である。それでは「意志」はどこに表れているだろうか。コミュニケーションにおいては、「～をしたい」「～をしよう」「～をしてほしい」というような形で明確に意志を表現しなくても、意志を伝えたり、あるいは、意志を感じ取ったりすることは可能である。そういう働きをする表現を探してみしてほしい。吉田はその表現に「意志」を感じ取ったから、「自分 (= 吉田)」がそれを眺めることが出来ると思っているのか」と反応するのである。設問箇所後の「いくらそんなことを云ってもぼんやり自分 (= 母)」がそう思って云ったということに自分が気がつかないだけの話で」という部分もヒントになる。

問五 吉田が現在の家に住むまでの経緯を問う問題。主に、設問箇所の次の段落をまとめることで答えられる。住む場所の変遷を追うと、「病気が悪くな」った「二年余り前」から、「病人を住ますに都合のいい離家のあるいい家」に移った現在までの、病床で看護を受けることが必要になっていく吉田の病状の進行も確認できる。

問六 「自分が平常自分について虫のいい想像をしている」とはどういうことかを問う問題。「虫のいい」・「虫がいい」は、「自分勝手」、「自分の都合だけを考えて、他人のことなどは全く考えない」という意味だが、どういう点が自分の都合だけを考えているということにあたるのかを答えてほしい。自分の病気のことが話題になり、人々に知られているということは、何を意味するものなのかという点も説明してほしい。

問七 荒物屋の娘の母親である「お婆さん」に対する考えの変化について問う問題。以前の「お婆さん」に対する印象は、4 ページの後半に書かれている。否定的な捉え方から肯定へという変化であることはほとんどの解答で触れられていたが、吉田を「しみじみ」させたものはなんだろうか。「あんなに見えていても」という言葉と共に語られる具体的なエピソードが何を語るものなのかを考えながら、「お婆さん」に対する評価の変遷をまとめてほしい。

問八 吉田の気持ちを問う問題。吉田がネガティブな気持ちになっているということは確かだが、その内実を詳しく説明することが求められる。娘の話を聞いて、自分も同じよ

うになるのではないかと不安に思ったというだけでは、不十分である。「同じようになる」とはどのようになることなのか、娘と比べて環境的には恵まれているかもしれないが、それでも娘と同じであるのはどんな点か考えてほしい。「そこ」が指しているのは直接的には明るい病室だがその象徴するものや、「自分だけが深いところへ落ち込んでしま」ったという「自分だけ」という言葉や、「深いところ」と「そこ」の対比なども含めて考えてみてほしかった。

問九 母の言葉から母の思いを読み取る問題。母が「嘆じて見せる」というところに注意してほしい。もちろん荒物屋の母娘の死を嘆じているのではあるが、それだけではない。「お婆さんが死んで二た月にもならないのに娘が死んだということから、自分は長生きしなければならぬという母の思いが読み取れる」というような解答が多く見られた。その思いはあるだろうが、息子のために長生きしなければという思いの一番根底にあるのはどんな思いだろうか。「あの娘はやっぱりあのお婆さんが生きていてやらんことには」という言葉を、吉田親子に置き換えてみて、吉田の母が、母と子の関係、自分と吉田との関係をどういうものと捉えているかという点を、まず押さえてほしかった。

II (配点 90 点) 出典：荒木田麗女『五葉』

荒木田麗女『五葉』より。宮のすけと中務の宮の姫君が、人目を忍びながら恋を育み、逢瀬とその切なさを描く物語である。

問一 ア 多くの人の目にもとまらないようである。

イ 言葉少なに、しみじみと申し上げなさる。

ウ 涙もこらえることがおできにならない。

全体によくできていた。訳出の際の細かい表現の揺れは許容されるが、敬語の訳出を忘れていた解答がしばしばあった(減点)。推量表現「なめり」、「忍びあへず」の意味の把握ができているかも重要である。

問二 A 姫君と宮のすけが互いに深く思い合い、将来を頼み合っていること。

B 人目を忍んでいるため、宮のすけが姫君のもとへ通う機会がまれであること。

Aはよくできていた。Bはやや正答率が低かった。「通い路」の「路」はここでは比喻である。「かたみに」「たまさか」などの単語をきちんと捉えること。

問三 (a) 宮のすけが、東宮の召しを断ることができず、御遊びの場に参上なさる。

「参り」は東宮の御遊びの場への参上を指す。主語を宮のすけと明確にとること。姫君との誤答がしばしばあった。こういところで主語を間違うとあとあとの解釈にも影響してしまうので注意深く読まねばならない。

(b) 姫君との約束を果たせず、東宮の召しに従わざるを得ないことを残念に思う気持ち。

会えない寂しさももちろんだが、その解答だけでは不十分である。東宮の申し出に逆らえないこと、そして姫君との約束が守れなかったことへの思いを押さえてほしい。

問四 (a) 月に隠してきた恋心なのに、月が晴れて明るくなったため、あなたの所へ通う道の妨げになってしまったと感じる。

「月にも忍ぶ思ひ」は、月に隠してきた恋心のこと。「晴るる」つまり月が明るくなることで、人目を避けて通うことが難しくなり、かえって逢いに行く妨げになる。「晴れやかな気持ち」とプラスの意味に解釈するのは「さはり(障)」とあることからして、ふさわしくない。この a はかなり正答率が高かった。

(b) 逢いに行きたいと思っていたのに、月が晴れてかえって通う妨げになってしまったことを、どうしようもないことだと嘆く気持ち。

「わりなし」は、道理に合わない、どうしようもないという意味である。月が晴れている夜だったため東宮の遊びに召されてしまい、そのため逢いに行くことができなくなった。つまり月が晴れて明るいばかりに、結果として逢瀬の妨げになってしまったという、思いと現実の食い違いを嘆く気持ちを表している。

問五 宮のすけは、人より先に退出し、夜がたいそう更けていたが、それでも姫君のもとにいらっしやった。

「まかでて」は退出する、「いたく更けつれど」は夜がかなり更けていたが、「おはしたり」はいらっしやった、という意である。正答率は高かった。

問六 宮のすけが自分を他の女性とは違う特別な存在として見ていることを感じ取り、気恥ずかしく思って、恨み言を言えない気持ち。

宮のすけが姫君を他の女性とは違う特別な存在として見ているという意味であり、その思いを感じ取った姫君は気恥ずかしく思い、本来なら言いたい恨み言を口に出すこ

とができないでいる。従って「特別扱いされてうれしい気持ち」といった解答は、ふさわしくない。正答率はやや低かった。

問七 宮のすけが、夜明けの気配の中で姫君のもとを辞去しようとするが、出て行くきっかけもなく、別れがたいため、その場を離れられずにためらっていること。

「出で行かん空もなく」は、立ち去るきっかけや理由がなく出て行けない状態を表す。

「やすらはれ給ふ」は、立ち去ろうとしてためらう意である。別れがたくて立ち去れずにいる様子をいう。

III (配点 75 点) 出典：『莊子』より

桓公が書物を読んでいたところ、車大工の扁がそれは残りかすだと言い、自分の生業である車輪作りを例に、その意図するところを語る。車輪作りにはコツのようなものがあるが、それは実際に自分で木を削って感じとり、体得するしかない。大事なことは言葉では伝えられないという扁の主張と、それを自身の経験になぞらえて述べていることを読み取ってほしい。

問一 基本的な読みの問題。cを「これをもって」とする誤答が多かった。

a あへ（／え）て b すでに c ここをもって

問二 書き下しの問題。たとえば「いづ（／ず）くんぞぎするをえんや」のように書き下してあればよい。ここでは場所について問うていないので、「安」を「いづ（／ず）くに」や「いづ（／ず）くにか」とするのは誤り。

問三 解釈の問題。「臣之事」が指すものは、「私の仕事」、「自分の経験」などであればよい。

「観之」について、書物に書かれているものを「糟魄」とみなす扁の見解と関連付けて解釈できているかがポイント。

問四 現代語訳の問題。たとえば、「これ（遅くも速くもないちょうどよい削り方）を手で感じ取って心で納得して」のように訳してあればよい。「応」は「手ごたえを感じる」などでもよい。「之」の指すものを具体的に示さず「これ」、「それ」としてもよいが、

直前の「不徐不疾」を踏まえて訳してほしい。「技術を手に入れて」などとするのは適切ではない。

問五 (a) は現代語訳の問題。たとえば「私は私の子に教えることはできないし、私の子もそれを私から教わることはできない」のように訳してあればよい。(b) は内容把握の問題。教えることも教わることもできない理由を、直前の設問箇所である「得之於手而応於心」と「口不能言」などから読み取ってほしい。

問六 内容把握の問題。ここまでに述べられてきた「本当に大事なことは言葉では伝えられない」ということから、書物として言葉で残っているものを車大工の扁がどのようにとらえているかを考えてほしい。「伝えなかったことの一部のみ」や「大事なことは少ししかない」のような解答が見られたが、量の多寡は着目すべき点ではない。